

志賀町小学校英語教育プロジェクト+

団体名 ● 前田ゼミナール、清水ゼミナール
代表者名 ● 前田昌寛（人文学部国際文化学科・准教授）

1 はじめに

今年度は国際文化学科前田ゼミに加えて、こども学科清水ゼミも加わり、志賀町小学校英語教育プロジェクト「+（プラス）」として活動を行った。2024年10月21日～22日に清水ゼミの学生が志賀町を訪れ「国際交流ははじめの一步」と題して活動を行った。第1部では、テディベアプロジェクト（TBP）の紹介、英語で自己紹介カード作成、志賀町紹介ビデオの作成を行い、第2部ではVRゴーグルを使っての台湾体験、ドローンを操縦しての台湾観光地訪問シミュレーションを行った。本学学生7名、小学生12名が参加した。そして、2024年12月15日、今度は志賀町の小学生が本学を訪れて「えいごクリスマス会」に参加した。Exchange a card（アイスブレイク活動）、ゾンビゲーム、クリスマスクイズ、おつかいゲーム、ジェスチャーゲームなどを行った。本学学生18名と小学生19名が参加した。

2 活動の内容

2-1 「国際交流ははじめの一步」(10月21日、22日)

小学校の高学年では週2回、中学年では週1回の英語の授業が始まっている。習った英語を使う場面があれば、その修得も早いと思われる。清水ゼミでは金沢市内の小学校と台湾の小学校をつなげるTBPを行っている。このTBPのワークショップを集まった志賀町の小学生たちに行った。そのあと、ICTを活用して台湾訪問の疑似体験をおこなった。

○ TBP の疑似体験活動

自分たちの代わりに台湾の小学校へ送るテディベアについての性格付けをおこなった。英語でパスポートを作ったり、服装なども考えたりした。こうすることで日本人としてのアイデンティティを考えることができる。



図1 TBPの仕組み

○ ICT を活用した台湾疑似体験

その1 台湾の観光地をドローンで訪問

台湾の観光地を巡るツアーを企画。スタートは台北の龍山寺で、途中、夜市と『千と千尋の神隠し』で有名な九分の山を越えて、南部の高雄の龍虎塔をゴールとするコース。このコースをトイドローンをプログラミングして飛行する。プログラミング教育をしながら台湾の観光地を訪問できる企画となった。

その2 VR 体験 台湾の街並みを歩く



図2 VRで台湾体験

台湾体験ができるVRアプリでGoogle street viewを360度の視野でみられるワンダーを使うと、台湾の観光地の九分などをVR上で訪れることができ、自分がまさに、台湾の地を歩いている体験を行うことができた。

2-2 「えいごクリスマス会」(12月15日)

○ Exchange a card(アイスブレイク活動)



図3 大学生とのカード交換ゲーム

英語を使って自己紹介カードを作成し、小学生と大学生が名刺交換をする。持っているカード全てを渡したら終了となる。

○ジェスチャーゲーム



図4 英語ジェスチャーゲーム

タブレットで見た英語の単語をジェスチャーで表現して、周りの参加者が当てる。簡単な単語でも表現するのが難しかったようである。

2-3 国際交流第3弾 台湾報告

清水ゼミの学生は冬休みを利用して、台湾の小学校を訪問している。台湾では多くの映像を撮影してきており、その映像を2月にこどもたちにみせる予定であったが、残念ながら雪で中止となった。

3 まとめ

国際交流ははじめの一步では、志賀町のこどもたちにぬいぐるみを使った国際交流である TBP のワークショップを行うことができた。学んでいる英語を使って必然性のある活動を仕組むことによって、英語の必要性をわかってもらえたと思う。また、こどもたちが性格付けし、英語で自己紹介を書いたテディベアはその後、実際に台湾の小学校へ送り、台湾での生活を満喫した。本来は2月の会でその様子を報告をする予定であったが雪のためできなかったのが残念であった。

クリスマス会終了後に質問紙調査を実施(回答者 $N = 19$)した。「えいごは好きですか?」との問いに、「すごく好き」「好き」を合わせると53%だったが、「えいごはうまくなりたいと思いますか?」との問いには79%が「すごく思う」「少し思う」と回答している。この数字のギャップにこそ、英語を難しいと感じていても、うまくなりたいという本音がみられ、英語学習の楽しさを具現化する本プロジェクトの存在意義があると考えている。

今回、英語の得意な人文学部の前田ゼミとこどもの扱いやICTの活用が得意な人間科学部こども学科の清水ゼミとのコラボで、年間を通したストーリーのある活動ができた。小学校では外国語が教科になってこどもの英語を話す力は伸びつつある。英語を楽しく使う機会を提供することは重要である。

国際交流は、相手のことを知るだけでなく、自分のことを発信する必要がある、発信力という点でこれから日本人に必要な力である。また外国と比較することで日本の良さにも気づくことができると思う。

本プロジェクトにあたりご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げます。